

序

日本の理学療法士は整形外科医と同じ屋根の下で、綿密にコミュニケーションを取った連携と協働が求められている。われわれ理学療法士が、整形外科医と協業するためには何が必要なのだろうか？私が考えるのは、①解剖学と運動学に基づく病態解釈を行う、②可能な限り運動機能の評価を定量化する、③徒手療法や運動療法、物理療法を駆使して、病態を改善するに尽きると考えている。

整形外科では運動器の構造破綻を修復し、運動機能の再建を目指した治療を行い、解剖学（構造）に基づいて病態を捉えることが多い。そのため、われわれ理学療法士が解剖学に加えて運動学的（機能）な視点から病態を捉えることで、より俯瞰的に病態を捉えることができる。その際に機能評価を触診や動作観察・分析に頼ってしまうと他者に伝わらない。定量評価は触診や動作観察・分析の重要性を下げるのではなく、その重要性をより高めることになる。物理療法や運動療法と比べて、徒手療法は技術の差も大きくなる。それが問題なのではなく、徒手療法の技術も高め、その他の各種治療方法を駆使して、最適な治療方法を提供できる知識と技術を持ち合わせていることが望まれる。つまり、解剖学や運動学に基づいて、定量評価により病態を把握し、手技や方法論に固執せずに、最適な治療の模索を続けていく理学療法士が求められている。これは特別な考え方ではなく、理学療法の『王道』であると思っている。『王道』であるものの、いずれかが不足すれば、思い描いたような治療効果が得られない。努力したつもりになっても思い描いたような効果が得られず、心が折れそうになる経験を積んだ理学療法士も多いと思われる。

本書は私が主催する運動器未来共創研究室（PREVENTS Lab）が発信している研究&臨床の成果をまとめたシリーズの第1弾である。理学療法の『王道』を進むことを志した理学療法士が膝関節の理学療法に特化し、2025年の現在の理学療法の研究と臨床を綴った。同じように理学療法の道を究めようという理学療法士が臨床で闘い続けるための背中を押す1冊になってくれることを願っている。

本書は羊土社の鈴木美奈子氏から関節ごとの分冊を作りたいと熱心に何度もお誘い頂

いた。しかし、類書もたくさんあるため、企画が進まなかった。何度も面談を重ねて、科学的根拠と臨床知を多く盛り込み、『理学療法の王道はこれだ』と示せる書籍にまとめることができたと思っている。本書が多くの理学療法士、そして患者のためになることを祈っている。そして、理学療法の王道を究めるために、多くの時間を理学療法に費やしていることを許してくれている妻 美知、長男 圭一郎、次男 蒼士に感謝を捧げる。

2025年10月

森ノ宮医療大学インクルーシブ医科学研究所
工藤慎太郎